

更なる躍進と飛躍，その土台となる研究力を生み出す場



経営学部長 教授 具 承 桓

今年 2017 年は京都産業大学経営学部が創設されて 50 周年を迎える年です。

本学部は 1967 年（昭和 42 年）創設以後、これまで 36,953 名の卒業者を輩出しました。また、現在 約 2,800 名の在学生在が更なる成長と未来創造のために切磋琢磨しています。このような成長は、本学部の歴代学部長のリーダーシップのもと、先輩教員の持続的な教育革新，研究力の向上，ファカルティメンバー間の円滑な意思疎通，何より教育と学生への熱い思いによるものだと感じております。こうした学部の良き伝統と雰囲気、常に社会の変化・要望を共感しながら、社会に役立つ人材の輩出をしてきました。

小職が本学部に着任したのは、2003 年。藤井則彦学部長の時代でした。当時はイノベーションや技術経営への社会的な要望が芽生えた時代でした。社会の変化と要望に答え、新しい教育内容の体系化過程で、今担当しているイノベーションマネジメント論（当時は「技術マネジメント論」）を新規専門科目として開講しました。全国ではじめて、学部に「技術マネジメント論」を開講したことがご縁となり、本学部を担当教員として着任し、現在までお世話になることができました。その後、3 学科への再編、それに伴う定員増を図りつつ、様々な教育内容の一新を続けてきました。私事ではありますが、その過程で他大学では見られない教員間の助け合いや率直な議論，研究者および教育者としての心構えを学ぶことができました。教育者と研究者としての道を歩み始めた私にとって、人生初めての職場である本学部で、様々な学習と経験をさせて頂きました。さらに、記念すべき 50 周年の年に学部長に就任し、大変光栄と思いつつも、良き伝統を継続しつつ、新しい創造により、「良い学部」、「良い職場」づくりという、重大な責任感も感じるところです。

多くの人々は節目の年を大事にします。人々は節目に目を向けることで、過去の歴史を客観的に見極める時間を持つとします。また、節目は未来の新しい節目を創造していく意識や意思，覚悟を再認識させてくれる機会にもなります。本学部は、記念すべき 2017 年、50 周年を迎え、お祝いと同時に更なる発展を引き起こすきっかけ作りを企画して参りました。それは、(1) 在校生による「活躍する卒業生再発見プロジェクト」、(2) チャレンジ応援クラウドファンディング、(3) シンポジウム及び交流会、(4) 京都マネジメントレビューの 50 周年記念号の出版、です。これらの企画を通して、

社会の様々な場所で活躍されている卒業生の皆様と現役の大学生、教員、そして事務の方々が協力し合って成し遂げるものです。そのため、この企画自体が、ありきたりの記念イベントではなく、手間をかけ、本学部の過去と未来を結びつけながらも、新しい挑戦そして発展を意味するものになっていると思います。

しかし、更なる発展や挑戦はそう簡単だとは思えません。高度成長期と共に成長の果実を享受してきた日本企業が、少子高齢化、グローバル化、ICT及びデジタル化の変化の波の中で直面し、様々な問題を抱えている様子と同様に、大学も同様な状況におかれています。現在の大学は、日本経済の成長期の大学とは大きく異なる状況に置かれており、私学を取り巻く環境の厳しさは増す一方です。少子化、低成長期の時代に、大学間の大競争は進行形です。それは研究者にとって憧れだったかもしれない国立大学も同じ状況です。

「学士力」、「教育の質保証」、「アセスメント」、「IR」など、これまであまり耳慣れていない言葉に、今日の大学は向き合わなければならなくなりました。その点で、大学は学問の「象牙の塔」だけに留まることはできない時代になってきたと思われます。一研究者として大変残念ですが、本来の研究を悠々と、黙々と遂行できるような状況は厳しくなりました。研究者が追求しようとする研究ができる環境を作り出そうとすれば、我々は何を考え、行動すればいいのか。その答えは、現実きちんと向き合うことで可能になると考えます。

周知の通りに、「大学での学び」が社会や企業の求めるものとは少しかけ離れたり、不十分だったりしたものが多々あったことも事実です。その原因は何か。「大学での学び」が4年間に見合った能力形成にまで至らず、卒業後、社会や企業、組織で通じないことを痛感する者が多々いるとすれば、謙虚に我々の教育内容や体制を振り返ってみるべきでしょう。そこで、我々経営学部教員一同は、この経営学部50周年という節目の年に、これまでの学科体制や教育体制、教育内容を見直し、「マネジメント学科」を中心とする新しい学部へと、発展的な変貌を拒まない学部へその一步を踏み出します。この体制を更に進化させ、実を結ぶためには、教育力が要であり、それを支えるのが「研究力」だと確信しています。「グローバル化」、「イノベーション」、「チェンジ（変化）」といった変化の中、大学こそが社会や企業から「学び」の内容や質に対する信頼を取り戻すことを望みます。その基盤になるものこそ、絶えない知的好奇心から生まれる「研究力」でしょう。

社会と共感しながら自分の役割をきちんと見つけ、幸せに生きていくための体力、知力、人間力を有する人材を輩出できる体制、それに向き合う教員の姿勢と資質を改めることが出発点だと考えます。その一つが本誌であるかもしれませんが、「象牙の塔」の化石化された知識ではなく、学問への探求を続けつつ、その成果を「大学での学び」に具現化し、社会と共感する人材養成で、社会にきちんとフィードバックできてこそ、「象牙の塔」が機能する経営学部になると思います。現在までの良き伝統を継承し、経営学部は絶えない研究力を「形」にする場として、議論の題材を提供する場として、ファカルティメンバー間の「知の交流」の資産として『京都マネジメントレビュー』を大きく育てていきましょう。

これからの50年，100年の大きな一歩は，研究室と教室からと信じています。

激変の今，A. Marshallの「Cool Head, Warm Herat」という言葉は別の意味で我々の心の中に響いてくると思います。（2017年 経営学部50周年の10月吉日）